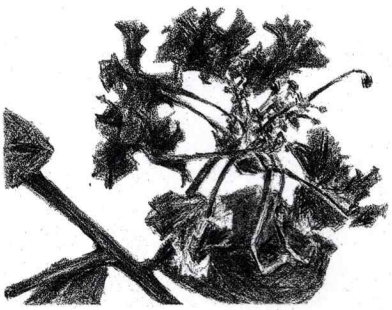
朝日歌壇 俳壇



〈サルスベリV〉　日高理恵子

高山れおな選

鬼やんまわが持たぬものすべてもつ　（佐渡市）千　草子

ちちの汗ははの汗みなはるかなる　（取手市）うらのなつめ

☆露の世やとはいへ貰ふ処方箋　（高槻市）若林眞一郎

ごきぶりが平気な夫を懐かしむ　（三鷹市）宮野隆一郎

老人の日の知らぬ間の打身かな　（大阪市）今井　文雄

越して来し坊やの声や天高し　（高槻市）日下遊々子

秋燕や小人踊らす時計台　（宮若市）光富　渡

桐一葉まじめに老いてしまひけり　（大和市）平子　進

鵜と悪代官と越後屋と　（岐阜県揖斐川町）野原　武

長き夜や覗けば深き俳句欄　（太宰府市）陶山　禎子

【評】千さん。中七下五の痛快な断言が描き出す鬼やんまの威風堂々ぶり。うらのさん。「汗」のリフレインに思いが籠る。若林さん。諸行無常と達観はしていても、生きているうちは生きねばならぬ。フェイントめいた「とはいへ」が面白い。

小林貴子選

身罷らむ泰山木の花を観て　（神奈川県二宮町）村岡多加子

台風の思ひ思ひの三つかな　（大阪府島本町）池田　壽夫

夜学生に学校渡す帰り道　（羽島市）緒方　房子

鬼太郎のおやじ入浴良夜かな　（瑞浪市）岩島　宗則

けふ白露空の牧場に羊来ぬ　（羽村市）塩入　香代

偉からずして大いなる生身魂　（船橋市）斉木　直哉

砲痕の石垣晒す南洲忌　（秋田市）松井　憲一

たうもろこしで良し最後の晩餐　（和歌山県串本町）前田　三紀

エリザベス逝き一年の寒露かな　（東京都）松木　長勝

神島に鷹の渡りを待つてをり　（尾張旭市）古賀勇理央

【評】一句目、白くて大きい泰山木の花は魅力的。これを堪能すれば私も安らかに逝けそう。二句目、天気図に台風が三つという句は他にもあるが、「思ひ思ひ」という発想が良い。三句目、全日制と定時制の生徒が交代。皆よく学んで欲しい。

長谷川櫂選

太平洋ブルー滴る秋刀魚焼く　（横浜市）佐々木ひろみち

俳句より省略されてゐる案山子　（一宮市）岩田　一男

帰り来て残る暑さの一軒家　（長野市）縣　展子

林檎にも生まれ故郷のありにけり　（大村市）小谷　一夫

静けさへダブルクリック秋の夜　（静岡市）松村　史基

鐘楼といへど楼のみ秋の声　（栃木県壬生町）あらゐひとし

室内を蜂が巡回台風裡　（熊谷市）内野　修

☆露の世やとはいへ貰ふ処方箋　（高槻市）若林眞一郎

秋天に足の弱りのもどかしや　（尼崎市）田中　節夫

秋暑しラグビー相撲プロ野球　（東京都府中市）志村　耕一

【評】一席。「太平洋のブルー」とあったが「の」は不要。太平洋ブルー！　二席。俳句には「間」がたっぷりある。案山子もまた。三席。残暑のこもる家。戸も窓も閉じてあったのだろう。十句目。熱いスポーツばかり。なかでも……。

大串章選

露の世を潜り抜け来て米寿かな　（尼崎市）田中　節夫

月光の零れ止まざる水車かな　（高山市）大下　雅子

雲の速さ時には月の速さとも　（仙台市）三井　英二

落とし物探す夜道にみみず鳴く　（川崎市）小関　新

眼差しは笠のかたむき風の盆　（土岐市）中野　和彦

黄泉からの招きの多き夜長かな　（いわき市）佐藤　朱夏

人に似し案山子とみれば動きけり　（大村市）小谷　一夫

牧水忌旅人に空明るくて　（所沢市）木村　佑

鳶が舞ふ限界集落柿熟す　（新座市）丸山　巌子

友ら雲になりて浮かべり秋の山　（東京都大島町）大村　森美

【評】第1句。はかないこの世ではあるが、88歳まで生きて来た手応えは充分ある。第2句。月の光に輝く水車の水を「月光」が零れると言い切った。詩的表現の妙味。第3句。雲が動いているのに月が動いているように見える時がある。

うたをよむ　金子兜太と齋藤愼爾

にしい洋子

俳句は「世界一短い文学」として世界に多くの作家がいる。私たちの月刊「俳句四季」は写真や絵をふんだんに使って美しく、悪口を言わない、生命感を大切に、地方の優れた俳人も紹介したいという思いから、一九八四年に創刊した。もう四十年が経とうとしている。創刊号の選者は原裕、波多野爽波、細見綾子のお三方に引き受けていただいた。

流行という服を身に着けさせるのがファッションデザイナーなら、俳句的思考（五七五）で、現代の出来事を「最短詩型」で表現するのが俳人。私には忘れ得ぬ二人の俳人がいる。

一人は金子兜太さん。兜太さんは言った。「私は耳が良いんだ。だから人の話をよく聞ける。耳は大事だ。人の話を聞けない人は伝えることができないから」と。戦場体験の話はご自宅で、幾多の講演もお聞きした。〈彎曲し火傷し爆心地のマラソン〉は長崎で詠まれた句。初めてお会いした頃に「なんでも書くよ。好きな句は？　どの句が良いか」と言われ、〈梅咲いて庭中に青鮫が来ている〉の句を色紙に書いていただいた。

もう一人は深夜叢書社主の齋藤愼爾さん。「僕は作品が良いと思う人の本を出したい。だけどね、良い本と言われるものは売れないんだ」。そう言い続けて、作り続けた。「俳句の究極は五七五で詠まれるが、季語を五音で表したとして、残る十二音で全人生、全宇宙を表現する」。〈梟や闇のはじめは白に似て　愼爾〉。身内以外で骨揚げをした後世に残るお二方との時間が、私の心の襞に刻まれている。

（「俳句四季」発行人）

記者サロン「歌人・科学者　永田和宏さん×AI短歌」　永田和宏さんを迎え、AIを使いながら歌や創作について語る催しを10月28日に朝日新聞東京本社で開きます。定員は120人（抽選）。締め切りは9日。11月2日から12月25日までオンラインでも視聴可能。申し込みは募集ページ（http://t.asahi.com/wn7z）、またはQRコードから。

☆印は共選作。掲載作は記事への引用や、電子メディアやSNSへの掲載・収録をすることがあります。投稿は無地のはがき1枚に1作品、未発表の自作のみ。作品の横に住所、氏名、電話番号を明記。〒104・8661　晴海郵便局私書箱300、短歌は「朝日歌壇」、俳句は「朝日俳壇」へ。二重投稿は不可。選者が添削する場合があ